

○藤崎成博・永田茂穂・鮫島國親¹⁾
(鹿児島農試大隅・¹⁾鹿児島農試)

【目的】

鹿児島県は、サツマイモや早出し露地野菜の生産が盛んであるが、畑地の利用率は低く輪作体系の確立や不織布資材等の汎用利用による低コスト生産技術の確立が急務である。そこで青果用サツマイモと共通利用可能な不織布資材の冬どりニンジンでの利用技術について検討した。

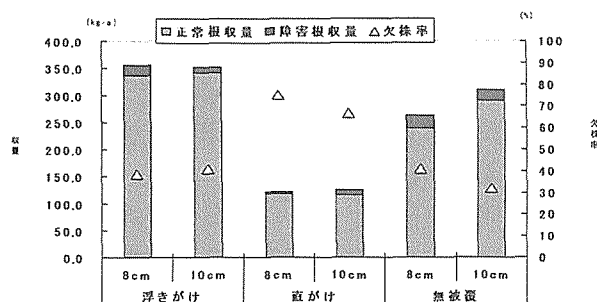
【材料及び方法】

試験1：不織布被覆法、株間が収量に及ぼす影響(2004年)。被覆法として浮きがけ、直がけ、無被覆の3水準。株間8cm, 10cmの2水準を設けた。**試験2**：は種期、被覆開始時期が収量に及ぼす影響(2003年)。は種期として9月24日, 10月7日の2水準。被覆開始時期としては種期, 間引き期の2水準を設けた。**試験3**：不織布資材の種類が生育・収量に及ぼす影響(2004年)。不織布資材としてポリプロピレン長繊維不織布(パオパオ90R, 以下PP長), ポリエステル長繊維+ポリエチレン割繊維不織布(ひだまり, 以下PET長+PE割), ポリビニルアルコール割繊維不織布(タフベル, 以下PVA割)の3水準, 使用年数として3年, 0年の2水準を設けた。供試品種はいずれの試験も‘向陽二号’。

【結果及び考察】

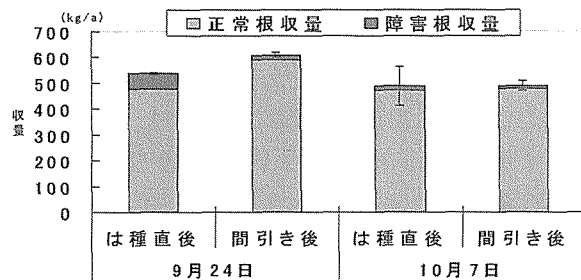
試験1：直がけ被覆は、は種期から被覆することで雨等の影響で欠株が多くなり、無被覆に比べて収量が劣った。一方、浮きがけ被覆は根身の肥大が促進され、2月収穫が可能で41kg/a増収した。なお、株間の違いによる差は認められなかった(第1図)。**試験2**：いずれのは種期も、不織布の被覆開始期を間引き期からは種直後に前進化しても、増収しなかった(第2図)。**試験3**：PP長, PET長+PE割の収量は2004年11~12月の高気温により生育が抑制され無被覆を下回った。資材の種類では早堀サツマイモ栽培にも適したPVA割の、収量が優れ、適することが明らかとなった。使用年数の違いによる差は認められなかった。

以上、輪作体系下での冬どりニンジン9月下旬~10月上旬は種は、間引き期からの不織布被覆により早進化が認められ、不織布簡易被覆により早堀サツマイモとの輪作が可能と考えられた。



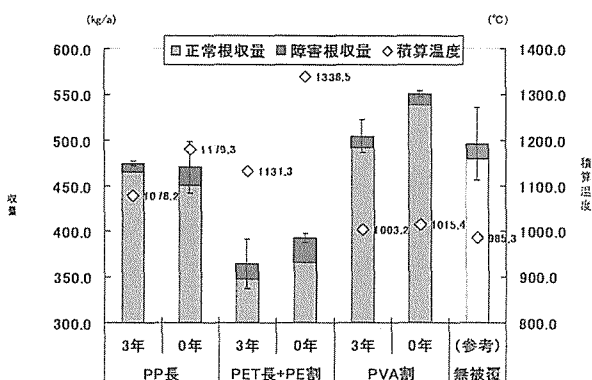
第1図 被覆法、株間の違いと収量

注) マルチ: 黒ハゲン, は種期: 10/4, 収穫期: 2/24, 被覆期: 10/6~収穫期, 資材: PP長



第2図 は種期、被覆開始時期の違いと収量

注) マルチ: 黒ハゲン, 収穫期: 2/9, 資材: PP長



第3図 不織布資材の種類と積算温度・収量

注) マルチ: 黒ハゲン, は種期: 9/21, 収穫期: 2/4, 被覆期: 10/28~収穫期, 被覆法: 直がけ, 積算温度: 11月1半旬~2月1半旬